ミュージアムコレクション 14

犬の噛み跡が残る土器

●コレクション・データ

時　　代　弥生時代中期
調　　査　唐古・鍵遺跡第 20 次調査
発 見 年　1985 年
大 き さ　高さ 7.7 ㎝
展示位置　第 2 室 「土器をつくる」

今年は「戌年」ということで、犬の噛み跡が残る土器を紹介します。

この土器には、壷の口縁部に小さな穴が半円弧状に三列並んでおり、形状から犬が数回噛んだものと考えられます。噛み跡は、土器を乾かしているときに付けられたもので、弥生の人がそれに気付かず焼いてしまったのか、それとも土器を見て犬を叱りつけていたのか――、のどかなムラの光景が目に浮かびます。

また、この土器は摂津地域（兵庫県南部・大阪府北部）で製作され、唐古・鍵ムラに運ばれてきたことも判明しており、小さな土器片にも多くの情報があることを示してます。

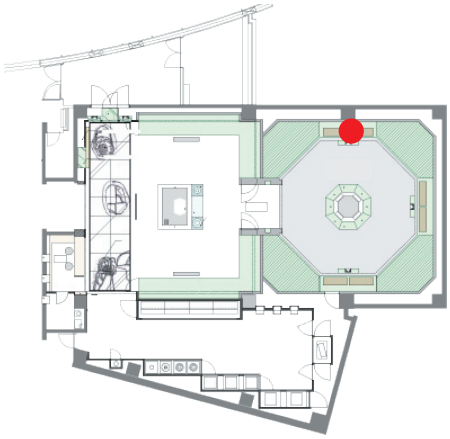
さて、犬はオオカミを祖先とする動物で、人類にとって最古の家畜と考えられています。シベリアやシリアでは、三万年前の遺跡から犬の骨が出土したという報告がありますが、近年のＤＮＡ研究では、一万五千年前の東アジアで犬の飼育が始まったとされています。

日本では、縄文時代の遺跡から犬の骨が出土し、愛媛県上黒岩岩陰では犬を埋葬した例があり、狩猟活動のパートナーとして、大切に扱われていたようです。

ところが弥生時代には、犬の埋葬例は少なく、唐古・鍵遺跡をはじめ、多くの弥生遺跡では犬の骨がバラバラで出土することから、食用にしたと考えられています。この時代には、朝鮮半島から新種の「北方犬」が入ってきたとの研究もあり、犬に対する考え方が大きく変化したのかもしれません。

その後の江戸時代でも犬を食用としており、番犬や狩猟犬として大名の財産になった獒犬や、愛玩犬とされた狆のほかは野良犬が圧倒的に多く、犬をペットとする習慣は定着していなかったようです。

現在、犬は最も身近なペットですが、犬と日本人との関係にはさまざまな歴史が隠されています。



ミュージアム上面図と展示位置